
光の輪

ライカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の輪

【Nコード】

N8129G

【作者名】

ライカ

【あらすじ】

生きることに疲れてしまった少女。自らの命を絶とうとしたその時、声をかけてきたのは一体何者なのだろうか！？本文を少し修正しました。

私は不思議な出会いをした。

あれは、人間だったのか。

それとも、幽霊？天使だったかも知れないし、
悪魔だったかもしれない。

本当に不思議な出会いだった。

あの出会いが無ければ、

私は今こうして思い出すという行為もできなかったただろう。

私はこの窮屈《きゅうくつ》な世界で生きていくのが苦痛でしかなかった。

他の人たちだって同じだとおもう。

窮屈で苦痛を感じながら生きているのに、私は逃げようとした。

気がついたら、私は何処かのマンションの15階くらいの高さの手すりに、腰をかけて周りを見渡していた。

私は、何もかも捨てて自由になろうと手すりから身を投げようとした。

すると、洋服の裾《すそ》を誰かに軽く捉《つか》まれ、本当に軽く捉まれただけなのに、力いっぱい通路側の方へ引っ張られたような気がした。

私は引っ張られた方に目を向ける。

そこには、真っ白な肌に背中まである白銀の髪に深紅の瞳に、真っ白な布を纏った人物が立っていた。

少女のような少年のような、深紅の瞳が特徴的な中性的な人物だった。

『あなたは、殺すの?』

抑揚の無い声が耳からではなく、直接頭の中に響いてきた。

「な、なに？」

何処から聞こえたのかと、辺りを見回す。

『あなたは、殺すの？』

また、同じ言葉が聞こえた。

「殺すって・・・何？」

『あなたは、殺すの？』

深紅の瞳に見つめられ、何を言いたいのか少し理解した。

「私は、イヤなんだ！この世界が！！苦しいんだよ！！」

深紅の瞳に怒鳴るでなく、しかし拒絶するように言う。

『あなたは、殺すの？』

「しつこい！私の命だ！私の好きにして何が悪い！！」

『あなたが、殺すの？』

深紅の人の問いかけが変わり、その腕の中には幾つもの光りがあった。

『あなたが、殺すの？』

その光りが私の周りを囲った。

「・・・何・・・？」

『あなたが、殺すの？』

その光りはとても温かかった。
まるで、母の腕に抱かれている様に。

「これは何？」

『あなたが殺す地球の一部^{ほし}』

その光りを手に取ろうと手を伸ばす。
しかし、その光りは私の手をすり抜けていく。

『あなたが、殺す限り触れない』

「あんた、何言ってるの？」

『この光りは、この地球の一部。でもあなたの一部でもある』
「私の一部？ 何言ってるの？ 訳わかんない」

深紅の人が手を伸ばすと、引き寄せられる様に集まってゆく。

『この光りはあなたの一部。あなたがあなたを殺せばこの光りはあなたと共に消える』

光りを愛しそうに抱きしめる深紅の人。

『この光りはあなたから紡がれる光り』

「つむぐ・・・？ ひかり・・・？」

深紅の人は何を言っているのだろう。何を言いたいのだろう。

「ねえ、はっきり言ってくれない？」

あんた、何を言いたいのか？」

『ちゃんと伝えている。あなたが理解しようとしていない』

「わからないから聞いているんだ」

深紅の人の表情が少しだけ陰った。

『この光りはあなたから紡がれる命。何千何億と紡がれるはずの命をあなたは殺そうとしている』

「別に、私一人がこの世界を紡いでいるわけじゃない。私一人がいなくたってこの世界は廻る^{まわ}」私は思ったことを口にした。

深紅の人は私の手を取り光りを1つ私の手に移す。その光りは意思を持つかのように私の手の上で宙に浮かびクルクル回っている。

「あったかい」

私は素直な感想を述べる。

『あなたから紡がれる命はあなたでなくてはいけない。

人の命だけではない動物の命、植物の命、これら総てがあなたから紡がれる光り』

深紅の人は私に手を差し伸ばす。

私は無意識にその手を掴んでいた。

『あなたが感じている苦痛は生きている証。喜びも悲しみも楽しみも知っているから感じられる。

あなたが、ここであなたを殺してしまったらこの光りたちは何も知らないままあなたと共に消滅してしまう』

私の頭が理解したのではなく、心が何かを感じたのだ。

その時、私の目から涙があふれて流れた。

その瞬間私は『死のう』とすることを止めた。

私は二の足でしっかりと通路に立ち深紅の人と向き合った。

「止めてくれてありがとう」

ぎこちない笑顔でお礼を言う。

「また、つまづくかもしれないけどでも頑張ってみる」

深紅の人の表情が少し柔らかくなったような気がする。

私にはその表情が眩しくそして気恥ずかしく感じ深紅の人に背を向ける。

「私なりに光り？頑張って紡いでみるよ」

『そう・・・それならあなたの生きる場所へ、光りの紡げる場所へお戻りなさい』

そう言って深紅の人は優しく私の背中を押した。

それを合図に私も歩き出した。

「本当にありがとう。さようなら」

顔だけ振りかえり最後の挨拶をして、こんどこそ、その場からはなれた。

背後から何か言葉が聴こえたけど、私には何と言ったのか聞き取れなかった。

『ありがとう、お母さん。死なないでくれて

いつかあなた（お母さん）の所へいけるのを楽しみにしているよ』

（おしまい）

(後書き)

光の輪読んで下さってありがとうございます。最初は題名は、『光の輪廻』にしようと思ったのですが、なんか、輪廻なんて書いても私の文章じゃ題名負けしちゃうそうだったので『輪』にしてみました。この話しは私なりに人の繋がり？を書いてみたつもりなのですが、何となくでも解ってもらえたでしょうか？最後に、感想・評価などいただけたら幸いです。

ライカ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8129g/>

光の輪

2010年10月30日09時02分発行